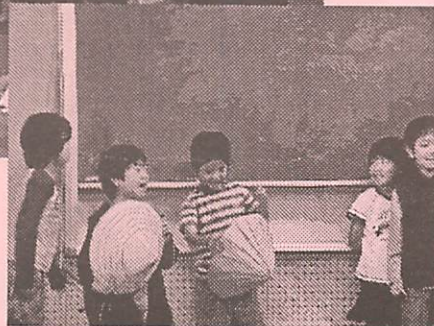


〈小学校 国語科〉

「伝え合う力」を育てる音読を取り入れた

文学的文章の指導

～第二学年「かさこじそう」の音声言語活動の工夫～



浦添市立前田小学校

玉城末子



## 目 次

I	テーマ設定の理由	1
II	目指す子供像	1
III	研究の目標	1
IV	研究仮説	1
1	基本仮説	1
2	作業仮説	2
V	研究構想図	2
VI	研究内容	3
1	「音読・群読」の指導について	3
2	読むことと評価の工夫	4
3	「音読・群読」と「伝え合う力」の関連	6
VII	授業実践	7
1	単元名	7
2	単元目標	7
3	単元について	7
4	指導計画	8
5	検証授業①	11
6	検証授業②	13
VIII	研究の考察	14
1	研究仮説1の検証	14
2	研究仮説2の検証	16
3	研究仮説3の検証	18
IX	研究の成果と課題	19
1	研究の成果	19
2	今後の課題	19
	【おわりに】	19
	【主な参考文献・引用文献】	19



# 「伝え合う力」を育てる音読を取り入れた文学的文章の指導

～第二学年「かさこじぞう」の音声言語活動の工夫～

浦添市立前田小学校 玉城末子

## 【要約】

本研究では、文学的文章に音読・群読を取り入れた授業を行うことで、「読むこと」の領域から「伝え合う力」が育つ要素の一つになるであろうと考え、授業展開の工夫を試みた。その結果、読みを深めることができ、音読により声を出すことへの抵抗が少なくなり、話し合いに参加することができるようになってきた。今後は、音読の継続指導と国語科の他の領域と関連づけた指導を工夫していきたい。

## キーワード

音読      群読      読みの形態      内容理解      伝え合う力

## I テーマ設定理由

現在の学習指導要領から、小学校国語科の目標に「伝え合う力を高める」が加えられた。これは、国語を適切に表現し、正確に理解する能力の育成を基盤に、お互いの立場や考えを尊重しながら言語で伝え合う、生きて働く国語力が国語科の重要な内容であるとしている。近年、読解力が弱い、語彙力が弱い等が、国語科教育に関するさまざまな課題として挙げられている。児童の学校生活での会話の中でも、曖昧な返事や相手の気持ちを考えずに言葉を発してしまう場面から、語彙力や伝え合う力の弱さを感じる。

1学期に担当する学級に実施したアンケートによると、「話すこと・聞くこと」の領域の学習では、書いたことを発表することはあまり抵抗を感じないようだが、考えや思いをみんなの前で話すことや内容に沿って話し合うことを苦手とする児童が多く、進んで発表することが好きな児童は4分の1程度である。

これまで、文学的文章の指導において発展学習として、「群読（役割読み）」による言語活動を取り入れ、児童がお互いの声を聞き合い、認め合い、読む喜びを味わうことや聞き手との感動の共有に重点を置いた実践を行ってきた。同アンケートの結果では、3分の1の児童は音読は好きではないが群読やみんなで声をそろえて読むのは好きだと答えている。

しかし、文章の一人読みを苦手とし、一語一語を拾い読みしたり漢字で戸惑ったりしている児童に対する音読の指導と、自分の考えや思いを言葉で伝え合うことの指導に工夫の必要を感じる。

三領域一事項の全ての定着を図ることが伝え合う力を高めることになるが、「読むこと」の領域

で、文学的文章から語彙を多く学び、相手の気持ちを考えて言葉を伝えることができるのではと考える。

多くの児童が楽しんで活動する群読で、一人読みを苦手とする児童がすらすら読める音読の指導を工夫し、内容を読み取ることができるようにしたい。また、聞き手を意識した読み方の工夫に動作化や話し合いなどの活動を取り入れ、楽しく読み味わわせたい。それは、その活動によって考えや思いを伝え合うことができると考えるからである。

そこで、音読の指導を工夫することで意味のまとまりごとにすらすら読めるようにし、文学教材において音読・群読を通して読み方の工夫するための「話し合い」や「読み合い」の指導を工夫することによって、お互いを認め合い、考えや思いを伝え合う子を育てたいと考え、本テーマを設定した。

## II 目指す子供像

言葉で自分の考えや思いを伝え合うことができる子

## III 研究の目標

読みを深める音読の工夫と群読で、読みに対する考えや思いを伝え合う指導の工夫改善

## IV 研究仮説

### 1 基本仮説

文学教材において、音読・群読を通して「話し合い」や「読み合い」の指導を工夫することによって、伝え合う力を育てることができるであろう。

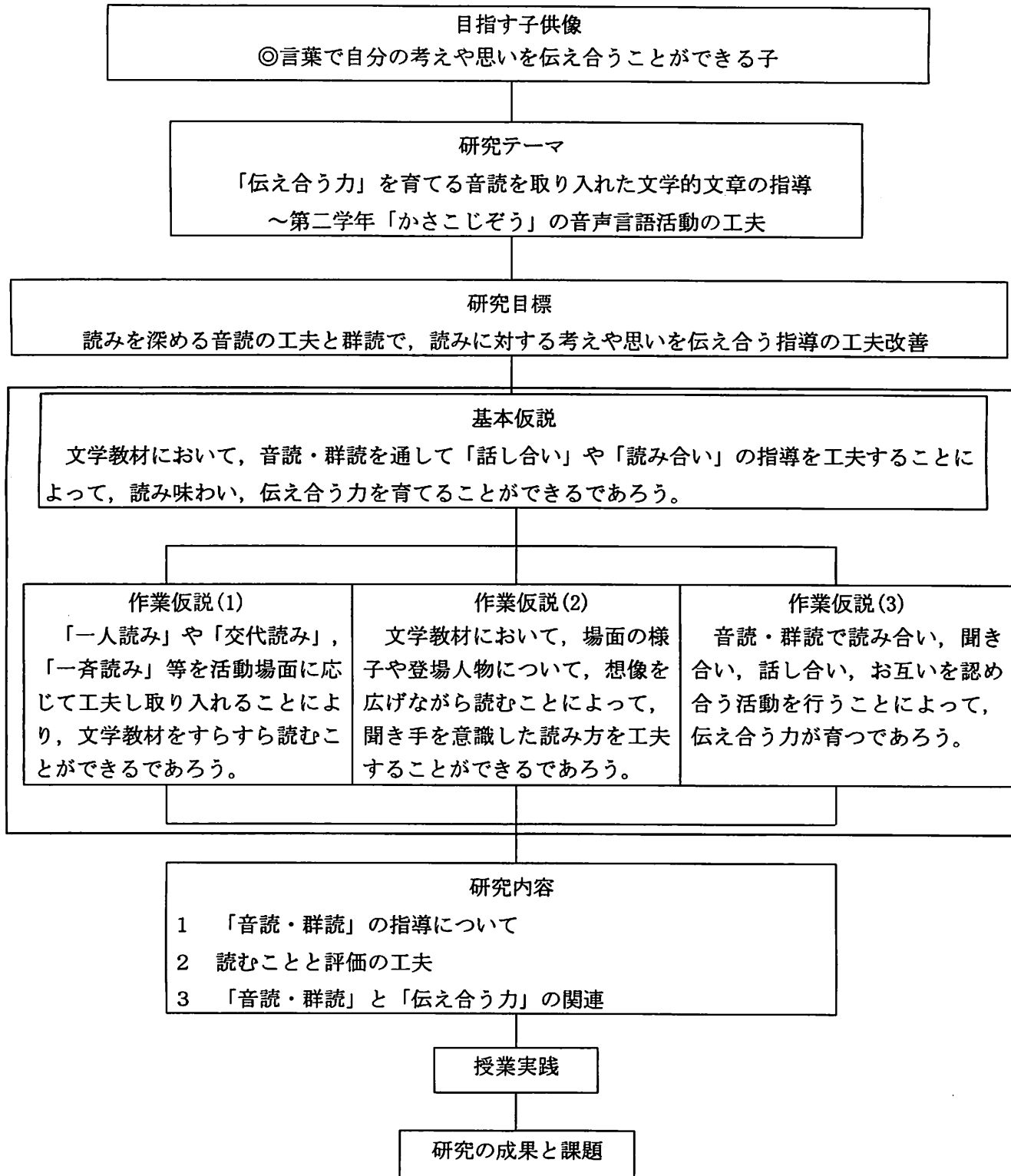
## 2 作業仮説

- (1) 「一人読み」や「交代読み」, 「一斉読み」等を活動場面に応じて工夫し取り入れることにより, 文学教材をすらすら読むことができるであろう。
- (2) 文学教材において, 場面のようにすや登場人

物について, 想像を広げながら読むことにより, 聞き手を意識した読み方を工夫することができるであろう。

- (3) 音読・群読で読み合い, 聞き合い, 話し合い, お互いを認め合う活動を行うことにより, 伝え合う力が育つであろう。

## V 研究構想図



## VI 研究内容

### 1 「音読・群読」の指導について

#### (1) 音読とは

音読とは文字に書かれたものを声に出して読むことすべてを言う。目だけで文字を読んでいく黙読に対する言葉である。また、狭義には、表出や伝達を意識することなく（自分の理解のために）声に出して読むことを言う。朗読に対する言葉である。

#### (2) 音読の効果

- ① 授業の活性化…時、場、文章内容に応じた適切な声で読むことの快感や、自分の喜びを友達に聞いてもらえるという喜びも味わえる。一人一人に自信を持たせ、聞く力を育て、集中力が身に付くようになる。
- ② 文章に対する愛着…繰り返し声に出して読むことによって、内容やリズム等の音声言語の面白さ、楽しさに目が向くようになり、その文章に愛着を持つ。
- ③ 文字や語句を正確に身につける…黙読では誤読が発見されにくいのが、聞き手に対して声に出して読むと、自他で誤読を発見し正しく読むことができる。
- ④ 言語感覚を養うことができる…音読を通して、言葉のリズムや音節の拍数の規則性や調子の良い繰り返しに気づくことができる。感覚を刺激し、豊かに想像することができる。
- ⑤ 文章を読み深める…読み深めのきっかけとなり、場面の状況や気持ちを捉え、内容の読み取りが高まっていく。語句の意味や文章内容の理解はただ音読をすれば身に付くものではなく、どのように読めばいいのかを検討させながら読むことで、効果が現れてくる。このことは群読とも関係してくる。

### (3) 授業での音読活動の形態

授業で取り入れられている音読活動の形態を表にした。(表1)

表1 授業での音読活動の形態

名 称	方 法
追いかけ読み	教師が句切って読み、復唱させる。
一斉読み	全員で声をそろえて読む。
確かめ読み	隣同士で、一方が読んでいる間もう一方は、読めているのか確かめながら聞く。
二人読み	席の隣同士で、一文交代で読む。
班読み	班で、一文交代で読む。
一文読み (マル読み)	一人一文ごとに全員で交代して読む。
段落読み	一人一段落ごとに交代して読む。
対話読み	主なる人物を取り立てて、その会話部分を続けて読み合う。
役割読み	登場人物毎に分担し、会話文などの割を決めて読む。または、地の文、会話文で分担して読む。
分担読み	全文を児童数に分け、全員で分担して読む。
重ね読み	擬音語、擬態語等を含む韻文等を文章と重ねて読む。
連れ読み	前文の語尾と後文の頭が重なるように読む。
自由読み(めいめい読み)	自分の読みの速さで、自分なりに考えながら読む。
向き変え読み	起立させ、1場面は窓を向いて、2場面は後ろを向いてのように向きを変えて読ませる。終わった子から座る。
場所変え読み	1場面は背面黒板、2場面は先生のところのように場所を変えて読ませる。
指名読み	教師が意図的に指名して読ませる。
微音読	小さな声での音読。音読から黙読へのつなぎの役目として位置する。

#### (4) 群読とは

辞書には群読という言葉は載ってない。

高橋俊三氏によると、もともと群読の誕生は、劇作家・木下順二氏が「平家物語」の表現法として提唱したことによる。氏は若き学徒に、自分たちの設計によって群読を創り楽しむことを勧めていると述べている。また、光村図書「指導法ハンドブック」では、役割音読の一種として位置づけられている。教材文を、内容に応じて一人や集団（複数）で分担し合いながら読むこととある。これらのことから、内容に応じていろいろな形態を取り入れながら役割分担して読む音読であると捉える。

#### (5) 授業に取り入れる群読の効果

高橋俊三氏は群読の教育的効果として、①学び合い、②響き合い、③聞き合い、④通い合い、⑤創り合いを提唱し、群読することによって声が響き合い、声を聞き合い、相互に学び合いが生まれる。子どもたちの心と心が通い合う。その上、共同（協同・協働）して新しいものを創り合う行為が成立する、と述べている。

文学的文章を読み味わう段階で、グループでどう読むのかを話し合い、読み取りをもとに意見を出し合い、工夫した読み方となる。また、他のグループと読み合うことにより、感想を交流し合うことができる。

例えば、2学年の「かさこじぞう」のクラス全員による群読で考えてみる。

- 群読会で、誰にどこで、何を聞かせるのかをはっきりさせる。
- 内容によって一人で、グループで、全員で等と役割分担をする。話し合いで、授業

を振り返りながら、例えば「『じょいやさじょいやさ』は力を合わせて重い荷物を引くように読みたいので、全員で読んだほうがよい」「かけ声をかけるように交互にしたらどうか」等と話し合う。できるだけ、全員に一人読みの役割を与える。

- それぞれの練習後、場面毎に読み合い聞き合う。そして、「〇〇さんの読み方は、じいさまがじぞうさまを心配しているようでよかった。」等と読みの工夫を認め合う。
- さらに良くするために、「ここはこう読んだ方がいいのでは」と考えを出し合う。このように、群読をすることにより、話し合いの必要性が出てくる。ただ話し合うだけではなく、考えを伝え、その考えを理解して声に出すのである。

## 2 読むことと評価の工夫

- (1) 学習指導要領から各学年の「読むこと」の内容を表2にまとめた。学習指導要領解説によると「低学年での声に出して読むことのねらいは、主に理解のためということが中心となる」とある。このことから、黙読より音読が理解をより確かなものにすると考えられる。

また、内容の1, 2年生の「声に出すこと」に関して、はっきりとした発音や意味内容が明瞭になるような語や文のまとまりで読むことができるようにすると記されていることから、言語事項の発音発声に関する事項の(7)姿勢、口形などに注意して、はっきりした発音で話すことと関連づけた指導が大切となる。

表2 小学校国語科学習指導要領「読むこと」の内容

	1, 2年生	3, 4年生	5, 6年生
読み 読書 的な	易しい読み物に興味を持ち、読むこと	いろいろな読み物に興味を持ち、読むこと。	自分の考えを広げたり深めたりするために必要な図書資料を選んで読むこと。

読み 読み	叙述に即した	時間的な順序, 事柄の順序などを考えながら内容の大体を読むこと。	目的に応じて, 中心となる語や文をとらえて段落相互の関係を考え, 文章を正しく読むこと。	目的や意図などに応じて, 文章の内容を的確におさえながら要旨をとらえること。
読み 読み	想像的な	場面の様子などについて想像を広げながら読むこと。	場面の移り変わりや情景を, 叙述をもとに想像しながら読むこと。	登場人物の心情や場所の情景など, 優れた叙述を味わいながら読むこと。
にか か	事象と感想・意見		読み取った内容について自分の考えをまとめ, 一人一人の感じ方について違いのあることに気づくこと。	書かれている内容について事象と感想, 意見の関係を押さえ, 自分の考えを明確にしながらか読むこと。
読み 読み	目的的な		目的に応じて内容を大きくまとめたり, 必要なところは細かい点に注意したりしながら文章を読むこと。	必要な情報を得るために, 効果的な読み方を工夫すること。
読み 読み	声に出す	語や文としてのまとめりや内容, 響きなどについて考えながら声に出して読むこと。	書かれている内容の中心や場面の様子がよく分かるように声に出して読むこと。	

## (2) 読むことの評価

語や文としてのまとめりで読むことやはっきりした声で読むことから, 次のような評価の観点を考えてみた。(表3)

表3 教師による評価規準

評価の観点	A	B	C
すらすら読める。	語や文で読める。	語として読む。	1字1字で読む。
適当な声の大きさで読める。	教室中に聞こえる声で読める。	近くの人に聞こえる声で読む。	隣の人に聞こえる声で読む。
句読点に注意して読める。	間をおいて読める。	間を取らないで読む。	句読点のない所で間をとる。
読み間違えない。	読める	誤読をする。	脱落読みをする。
表現しながら読める。	読める。	少し表現しながら読める。	棒読みで読む。
適当な速さで読める。	ちょうど良い。	速すぎる。	遅すぎる。

## (3) 読みの工夫

心を豊かにする新しい読みとは～文学的文章の読みを通して～成家亘宏 (教室の窓2006. 9) は読みを深める音読として次のように述べている。

- ① 児童が「大切」だと思った場面を何回も音読
- ② 児童が「好きな場面」を何回も音読
- ③ 人物になりきって「せりふ」のように音読
- ④ 場面によって抑揚, 強弱等をつけて音読
- ⑤ 「書き込み」「吹き出し」部分を本文に付け加えて何回も音読

読みを深めるための音読を1時間の授業の中で効果的に一人ひとりに何回もさせたいと考える。そのためには、表1のような音読の形態を工夫する必要がある。

#### (4) 感想交流の工夫

これまでは教師対子どもたちで話し合いを進めてきたが、挙手をした子を意欲があるからとどんどん発表させる。だが実際には全員が発表しているのではなく限られた子どもたちの場合が多い。そこで、ペア対話や3、4人のグループ対話の活動を取り入れ、1時間の中で1度は自分の思いや考えを伝えさせたいと考える。その後、全体での交流の場にした。

##### ① 役割分担

内容に応じて音読の形態を用いる。一人読みがいい場合はにぎやかな場面は声のよく出る子を静かな場面は声が小さい子が効果的なことに留意する。どんどん人数を増やして声を大きくしていく方法もある。どの形態がよいのかを話し合う。

##### ② 読み方の工夫

- ・「,」で1つ休み, 「。」で2つ休み
- ・喜び…高く速く
- ・悲しみ…低くゆっくり
- ・驚き…高く強く速く
- ・苦しみ…弱く低く

等, どう読めばよいのか分からない児童への手立てとして, 記号を作成する。

### 3 「音読・群読」と「伝え合う力」の関連

#### (1) 音読と話すことの技術から

音読の技術として取り上げられる指導事項は, 次の6つである。

- ア 発声 イ 発音 ウ アクセント
- エ 抑揚とイントネーション
- オ ポーズ(間) カ 緩急

これらの音読の技術を児童が磨いていくことは, 正しい日本語の習得に繋がるといわれている。音読で相手を意識して読む技術は相手に話を伝えようとする技術と一緒に, 伝え合う力の基盤となっている。

#### (2) 音読・群読による自信と話す意欲

(「伝え合う力」を育てる指導細案小学1・2年編 瀬川榮志監修 明治図書)

#### 教室に声の文化を作る

単なる親しいもの同士のプライベートなおしゃべりと違って, パブリックな場で自分らしく話すことは一朝一夕には行かない。まず教室の中に文化を育てたい。(略) 一人一人に声を出す機会が保証され, 自分自身の表現が認められる回数が多くなればなるほどにパブリックな場面で話すということの抵抗感は薄れていくものである。子供の声を磨き, 教室に声の文化を根づかせるには取り組みやすいように, 国語科にとって基幹の活動ともいえるべき音読や朗読の活動を見逃すことができない。(略)

声を出すことは, 元気を出すことであり, 自分を出すことでもある。聞くことは人の思いを受け止め, その良さを知り, 自分の思いや表現を練り上げるための積極的な行動である。～略～

とあるように読み合う時, ただ読むのを聞くのではなく, 評価をしながら聞くので, 思いを伝え合いたい。その時, 気をつけることは, 良かったところを見つけて, 音読を認め合うことである。そのことが自信となり, 話す意欲や態度に繋がると考える。

#### (3) 音読・群読と伝え合う力

読み方を工夫する過程で, ペア対話や3、4人のグループ対話などで読み方の工夫を話し合うと, 「ここは, ○○だからゆっくり読んだ方がいいかな。」「ここは, ～ふうに読んだ方がいいから全員で読みたいけどどう?」などとお互いの考えを伝え合いながら読みを深めることができる。

これらのことから, 音読・群読と伝え合う力の関連を次のように考える。

- ① 聞き手を意識して読むことで, 聞き手に届く発声や発音に気をつけて話すことができる。
- ② 話の内容が分かるように読むことで, 聞き手に気持ちを伝えるようにすることができる。
- ③ 友達の読みを聞くことで, 話し手がどう伝えたいかを知ることができる。
- ④ 読み手に感想を伝えたり, アドバイスをしたりすることで, 自分の考えや思いを相手に伝えることができる。



- ⑤ 聞き手の思いや考えを聞くことで、相手の伝えたいことを理解しようとすることができる。
- ⑥ 群読をする過程で読み方の工夫や役割分担などを話し合うことによって、伝え合った結果を創り出すことができる。

## Ⅶ 授業実践

### 1 単元名

本の世界を楽しもう  
学習材 「かさこじぞう」

### 2 単元目標

- (1) 聞き手にはっきりと聞き取れるように、声の大きさや速さを考えて話すことができる。
- (2) 町や村の様子を豊かに想像したり、じいさまやばあさまの語り口に親しんだりながら声に出して読むことができる。
- (3) 民話調の読み物の面白さに気付き、読みたい本を探して読書しようとする。

### 3 単元について

#### (1) 教材について

本教材は、日本各地に伝承されている「笠地蔵」の話をもとにして、児童文学者岩崎京子氏が再話したものである。そのため、民話の特色ともいえる語り手の客観的な目で語られ、心理描写が少ない他の再話に比べて、登場人物の心理を表す文が多くなっている。会話文も多いので、人物の言動から気持ちを読み取ったり、場面の様子を読み取ったりしやすい。

会話文の中には、ふんだんに方言が取り入れられ、登場人物であるじいさまとばあさまの「ええがのう」「ありゃせんがのう」等の会話は、素朴で温かみのある人柄が親しみをもって伝わるように書かれている。音読をしながら二人の人柄を想像させたいと考える。

二人は「その日その日をやっどくらし」、大晦日に餅の用意もできないほどの貧乏な暮らしである。児童には想像しにくいものであろう。補説をしながら読み取らせる必要がある。そのような貧しい二人だが心は非常に豊かである。じいさまは売り物のかさだけでなく、自分の手ぬぐいまでかぶせるほど思いやりがあり、ばあさまは、そんなじいさまに対して、「ええことをしなすった」と温かく

迎える優しさがある。見返りを期待していない二人のもとに地蔵様からの贈り物が届けられる。その展開に児童は温かな気持ちになり、会話読みをしたり、役割読みをしたりして、繰り返し読むことで楽しみながら音読できると考える。

#### (2) 児童について

本学級の児童は、文学的文章の学習において、一学期に2つの文学的文章を扱った際は、発展として全員に一人読みを分担し、グループ読みや一斉読みを取り入れて読み合うことで、声に出して読むことの楽しさから読みへの抵抗を少なくしてきた。叙述に即して登場人物の気持ちや場面の様子をいきいきと表現できる児童がいる反面、人前で発表したり音読したりすることの苦手な児童もいるので、家庭での音読も音読カードを用いて継続している。

話し合い活動では、さらに多くの児童が消極的で、全体の場で考えを発表することを苦手としており、相手を意識して音読することで声を出さず抵抗を少なくしたり、ペアやグループでの感想交流をしたりすることで、話し合い活動に参加させる工夫をする。

読書に関しても個人差が大きく、傾向として、愉快的な話やお化けの話などを好んでいる。今回の授業を通して、民話などを読むことの楽しさを味わわせたい。

#### (3) 指導について

本単元では、じいさまとばあさまのほのぼのとしたやさしさを感じ取ってほしいと考える。確かめ読みやじいさまとばあさまの会話読み、会話と地の文に分かれた役割読み、グループ読みなどの音読の形態で、繰り返し読むことから、たっぷりと読む時間を取り入れていく。また、場面の様子に迫るために、「おおみそか」「冬」「村はずれ」「ふぶき」などの言葉から、季節・天候・音などの言葉に着目し、想像することも取り入れていくことにより、音読がさらに活性化すると考える。

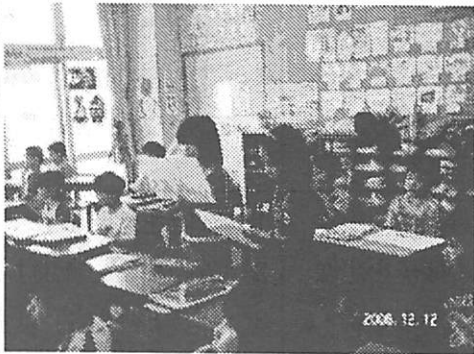
音読を中心に授業を展開し、読み方を工夫するための視点(ゆっくり、速く、強く、弱く、リズムをつけてなど)の読み合いや話し合いをペアやグループで行って読みを深めることや、聞き手を意識して発音や発声に気をつけたり、感想交流を行ったりして伝え合

う力を育むことができると思う。  
さらに発展として、他の民話や童話を読む

時間を設け、群読会を開くことで、読書意欲を高めたい。

#### 4 指導計画

	学習目標	主な学習活動	主な教師の支援 (☆) と評価 (□)
第 一 次	1 「かさこじぞう」の範読を聞き、感想を持つことができる。	1 「昔々あるところに…」で始まる本の題名を紹介しあう。 2 「かさこじぞう」の全文を読む。 (教師の範読、子供の音読) 3 初発の感想を書く。	☆ 昔話に興味を持たせる。 ☆ 新出漢字は子供の音読の前に教え、読めない漢字はその場で教える。 ☆ 読めるようになるまでルビを打たせる。 □ 話の中から心に残ったところを探して書くことができる。
	2 語や文としてのまとまりで、すらすら読めるようにし、物語の大筋を捉えることができる。	1 自由読めで、意味の分からない語句を調べながら読む。 2 二人読みをする。 3 新出漢字の学習(6つ)。 4 確かめ読みをする。	☆ わからない語句を挙げさせて、意味を解説する。 ☆ 読めない子ははさみ読みで語のまとまりで読むようにさせる。 □ すらすら読むことができたか。
3		1 二人読みをする(2回)。 3 ページ読みをする(2回)。 聞き手は1ページ読み終わる毎に何回引っかかったかを知らせる。 4 全員で一文読みをする。 5 新出漢字の学習(6つ)。	☆ 交互に1文ずつ読み、相手の読んでいる文字を目で追う。 ☆ 引っかかりを数えることで、読み手は正確に読もうとする。 ☆ 全員の読みを確かめる。 □ すらすら読むことができる。 ☆ 書くことにより正確に覚えることを意識させる。
第 二 次	4 学習のめあてを持つことができる。	1 一斉読みをする。 2 5つの場面に分け、場面ごとの筋を捉える。 3 初発の感想を発表し合う。 4 感想をもとに課題を考える。	・ 他の読みを聞きながらすらすら読みの感覚をつかませる。 ☆ 時間や場所から場面を考えさせる。 □ 場面の変わり目が分かり、大まかな内容が理解できる。(発言) □ 感想を発表したり、聞いたりすることができる。

5	じいさまとばあさまの暮らしぶりを想像しながら音読することができる。	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 一の場面を音読（確かめ読み）する。</li> <li>2 隣の席の児童とじいさまばあさまに分かれてどう読むかを話し合いながら会話読みをする。</li> <li>3 前後のペア同士で読み合い感想交流をする。  <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px 0;">           ぼくたちは、…を～読みます。（読む）どうでしたか         </div> </li> <li>4 全体で話し合う。</li> <li>5 一の場面を一斉読みする。</li> </ol>	<p>☆ じいさまとばあさまになったつもりで読むように指導する。</p>  <p>・ 読み合う前にどのように工夫して読むのかを知らせる。</p> <p><b>読</b> 二人の貧乏な暮らしぶりを読み取っている。          （音読、発言、ワークシート）</p>
6	町の様子やすげ笠を売るじいさまの様子を想像しながら音読することができる。	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 前時を想起する。</li> <li>2 二の場面を音読（確かめ読み）する。</li> <li>3 町の様子（売り人の声や客の声）を知る。</li> <li>4 店の人や客とじいさまになって役割音読をする。</li> <li>5 声を張り上げてかさこを売っているときのじいさまの気持ちと売れずに帰るときの気持ちを読み取る。</li> </ol>	<p>☆ いろいろな店の売り手と買い手の会話が飛び交っていることを知らせ、声を張り上げることを読み取らせる。</p> <p><b>読</b> 町のにぎやかな様子や必死にかさを売ろうとするじいさまの様子を読み取っている。          （音読、発言、ワークシート）</p>
7	地藏様に笠をかぶせるじいさまの様子を想像しながら音読することができる。	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 前時を想起する。</li> <li>2 三の場面を音読（確かめ読み）する。</li> <li>3 動作化しながら役割読みをする。</li> <li>4 地藏様に対するじいさまの優しさを読み取る。</li> </ol>	<p>☆ じいさまの優しさを様子や言葉遣いに注目させて感じさせる。</p> <p><b>読</b> 地藏様を気遣い、笠や手ぬぐいをかぶせたじいさまの様子を読み取っている。          （音読、発言、動作化）</p>

T「場所はどこ。」

C<sub>1</sub>「村はずれ」 C<sub>2</sub>「野っ原」

T「どんなところ。」

C<sub>3</sub>「お堂はない」 C<sub>4</sub>「木のかげもない」

C<sub>5</sub>「隠れるところが何もない」

C<sub>6</sub>「おじいさんも寒いんだ」

第 二 次	8	じいさまを迎えるばあさまの様子や、餅つきのみねごとをする2人の様子を想像しながら音読することができる。	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 前時を想起する。</li> <li>2 四の場面を音読（確かめ読み）する。</li> <li>3 会話読みをする。前後のペア同士で読み合う。</li> <li>4 2人のやりとりから、ばあさまの優しさを読み取る。</li> </ol>	<p>☆ かさこが売れたことよりも先にじいさまに「つめたかったろう。」と声をかけるばあさまに注目させる。</p> <p><b>読</b> ばあさまの優しい人柄を読み取っている。 (音読, 発言, ワークシート)</p>
	9 検 証 授 業 ①	真夜中の出来事の様子を想像しながら音読・群読することができる。	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 前時を想起する。</li> <li>2 五の場面を音読する。</li> <li>3 「じょいやさ」「ずっさん」の繰り返しの読みから情景を想像する。</li> <li>4 読み方の工夫を話し合い読み合う。</li> <li>5 役割読みをする。</li> </ol>	<p>☆ 重くて運びきれないほどのものを運んできたことに気づかせる。</p> <p><b>読</b> 真夜中の出来事の様子を読み取っている。 (音読, 発言, ワークシート)</p>
第 三 次	10	「かさこじぞう」を全員で群読する。  C <sub>1</sub> 「最初のじょいやさじょいやさは6回」 C <sub>2</sub> 「みんなを半分に分けて、かけ声のように交代で言う」 C <sub>3</sub> 「ずっさんずっさんは7回」 C <sub>4</sub> 「じいさまはどこだは、足に合わせて。」	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 これまでの学習を想起する。</li> <li>2 グループ読みや全体読みの役割分担を話し合う。「〇〇だから（グループでまたは全体で）読みたい。」</li> <li>3 全体読みの部分を読む。</li> <li>4 グループ読みの部分を読む。</li> <li>5 全文を通して群読する。</li> <li>6 良かったところを発表する。</li> </ol>	<p>☆ これまでのワークシートから子供の声を持ち上げ、紹介する。</p> <p>☆ 一人読みの役割分担は予め希望をとり、教師の方で決める。</p> <p>☆ どう読みたいかの理由を言わせながら話し合う。</p> <p>☆ 場面の様子がわかるように、言葉を加えるなどの工夫も取り入れさせる。</p> <p><b>話聞</b> 進んで話し合い、読み合い、認め合おうとしている。</p>
	11	民話のおもしろさや特色に気づき、さらに読もうとする意欲を持つことができる。	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 かさこじぞう以外の民話や昔話を探して読む。</li> <li>2 読み比べをする。</li> </ol>	<p>☆ 読んだら軽くメモをして、次時の活動の参考にさせる。</p> <p><b>関</b> 民話のおもしろさや特色に気づき、さらに読もうとする意欲を持つことができる。</p>

第三 次	12	好きな民話や昔話をグループで群読する。	1 好きな場面を選び、役割分担や読みの工夫について話し合い、読み合う。	☆ 予め教師が本の選定を行い、児童はその中から好きな本を選び、グループづくりをする。 ☆ 話し合いが進まないグループは援助する。 <b>話聞</b> 話し合い、読み合い、認め合おうとしている。
	13	グループや全体の群読をして、友達や家の人と感想交流をすることができる。	1 好きな本の群読を1グループずつ発表する。 2 感想交流をする。 3 「かさこじぞう」の群読をする。 4 保護者の感想を聞く。	☆ 聞き手はクラス全体と家の人であることを意識させる。 <b>読</b> 読み方を工夫して読むことができる。 ☆ 良いことを発表させる。 ☆ 聞き手は家の人であることを意識させる。 <b>話聞</b> 感想を話したり、聞いたりすることができる。

### 5 【 検証授業①】 (9/13時)

#### (1) 目標

真夜中の出来事の場面で友達の読みと自分の読みを聞き比べながら楽しく読みあうことができる。

#### (2) 授業仮説

- ① 米俵などの具体物を見たり、量感を知らせたりすることで、イメージが広がり、読み方の工夫をすることができるであろう。
- ② 読み方の工夫を話し合うことで、読みが深まるであろう。
- ③ 読み合ったり話し合ったりすることで、お互いを認め合いながら音読をすることができるであろう。

#### (3) 評価規準

〈関心・意欲・態度〉

- ・ 真夜中の出来事の様子を想像しようとしている。
- ・ 読み合ったり、話し合ったりして音読しようとしている。


〈話す・聞く〉


- ・ 自分の考えや思いを友達に話したり、友達の考えのよさに気づきながら、聞いたりすることができる。

〈読む〉

- ・ 真夜中の出来事の場面の言葉に着目し、読むことができる。

#### (4) 展開

	学 習 活 動	☆指導の留意点と支援 ◎主な発問	評 価
導 入	1 前時の学習を振り返る。 2 教師による範読 3 確かめ音読をする。 	☆ 簡単に振り返らせる。 ☆ すらすら読むことを基準とする。 ◎「読み手は聞き手に聞こえるように聞き手はよく聞いて良かった点を教えます。」 ☆ すらすら読めているかを確認する。	<b>音読</b> すらすら読むことができる。(評価ワークシート) 評価の観点 ・ 語や文で読める。 ・ 適当な声の大きさと読める ・ 句読点に注意して読める ・ 読み間違えずに読める
	4 学習のめあてを提示する。 よいお正月をむかえることができたうれしさを読み合おう。		

展 開	<p>5 じいさまやばあさまになって、真夜中に聞こえる音を考える。 「じょいやさじょいやさ」 「6人のじぞうさ かさこつつかぶせた じさまはどこだ ばさまはどこだ」 「ずっさんずっさん」</p>	<p>◎ 「目を閉じて静かにすると、話の中から何が聞こえてきますか。」 ☆ 静かな夜とじぞうさまの声に注目させる。 ☆ 「じょいやさ」や「ずっさん」などは2回だけではないことを気付かせたい。 ☆ 具体物を見せたり、実際の重さを知らせたりする。</p>	<p>関 真夜中の出来事の様子を想像しようとしている。</p>
	<p>6 真夜中の出来事を全体で話し合う。</p>	<p>☆ じぞうさまがじいさまとばあさまのために重い荷物を運んできたことを読み取らせる。 ☆ 置いていった荷物は、二人が買ったかった正月に必要な物であることを読み取らせる。</p>	
ま と め	<p>7 工夫して読むところに音読記号を記して、理由を書く。</p>	<p>☆ 一番工夫して読みたいところから考える。</p>	<p>話聞 自分の考えや思いを友達に話したり友達の考えを自分の考えと比べながら聞いたりする。 (感想交流)</p>
	<p>8 グループで一人ずつ工夫を発表して音読する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>ぼく(わたし)は、〇〇を… 読む工夫をしました。その理由は**だからです。読みます。</p> </div>	<p>☆ 読み手が読んだ後、聞き手は感想を話す。</p>	<p>読 真夜中の出来事の場面の言葉に着目してよんでいる。 (音読、発言、ワークシート)</p>
	<p>9 工夫したところを全体で話し合い読み合う。</p>	<p>☆ 工夫した理由と工夫した部分だけを読ませる。</p>	
	<p>10 お礼の品物を届けるための掛け声や無事にお正月を迎えることができた喜びを全員で読み味わう。</p>	<p>☆ 聞き手は授業を見ている先生方にする。</p> 	<p>読 真夜中の出来事の場面の言葉に着目してよんでいる。 (音読、ワークシート)</p>

【検証授業②】 (13/13 時)

(1) 目標

グループや全員で群読をして、友達や家の人と感想交流をすることができる。

(2) 授業仮説

- ① 場面の様子や登場人物について、想像を広げながら読むことで、聞き手を意識した読み方の工夫をすることができるであろう。
- ② 感想を交流し合うことで、自分の思いを伝えたり、相手の思いを受け止めたりすることができるであろう。


(3) 評価規準

〈関心・意欲・態度〉

- ・ 友達の声を聞き合いながら群読しようとしている。
- ・ 自分の思いを伝えようとしている。  
〈話す・聞く〉
- ・ 自分の思い（感想）を読み手に話したり、聞いたりすることができる。  
〈読む〉
- ・ 昔話の楽しさを声に出して読むことができる

(4) 展開

	学 習 活 動	☆指導の留意点と支援 ◎主な発問	評 価
導 入	1 今日の授業の流れを確認する。 2 読み手と聞き手を確認する。 読み手 ・伝える相手はだれか。 ・どの様な様子を読んで伝えたいか。 聞き手 ・どう読んでいるのかしっかり聞く。 ・聞いて思ったことを読み手に伝える。	☆ 授業の流れを説明し、読むことと聞いた感想を伝えることを知らせる。 ☆ 読み手意識, 聞き手意識を持たせる。	
展 開	3 学習のめあてを知る。 昔話を読んだり、聞いて感想を伝えたりしよう。	◎「これから、昔話の好きな場面をグループで群読してもらいます。どの場面をどのように読みますと発表した後読みます。しっかり聞いてどこが良かったのか教えてください。」 ☆ 群読の前に本の名前, あらすじや読み方の工夫を紹介させる。 ☆ 1グループ毎に3人ほど感想を発表させるが、友達の感想を聞いてうなずいたりつぶやいたりして参加させる。	読 昔話の楽しさを声に出して読むことができる。 聞 自分の思い（感想）を読み手に話したり、聞いたりすることができる。 関 自分の思いを伝えようとしている。
	4 昔話の好きな場面をグループで群読する。 ① かぐやひめ ② うらしまたろう ③ ねずみのすもう ④ かもとりごんべえ ⑤ やまんばのにしき ⑥ ぬすくマーペー ⑦ ガーナー森とオーバー岩 ⑧ ひやくにんのおとうさん (グループの群読が終わる毎に感想を伝えたり聞いたりする。)		

展 開	5 「かさこじぞう」を全員で群読する。 	◎「これまで、音読を中心に学習してきた『かさこじぞう』を群読します。1の場面ではどのような様子を読みますか。2の場面では…。」 ☆ 場面毎の様子を確認する。 ☆ 聞き手は父母であることを意識させる。 ☆ 聞き手となり、しっかり相手を見て話を聞くことを確認する。	<b>読</b> 昔話の楽しさを声に出して読むことができる。 <b>関</b> 友達の声を聞き合いながら群読しようとしている。 <b>話聞</b> 感想を聞くことができる。
	6 父母から感想を聞く。		
まとめ	7 今日の学習について感想を発表する。	☆ めあてから振り返らせる。	

## Ⅷ 研究の考察

### 1 研究仮説1の検証

一人読みや交代読み、一斉読み等を活動場面にに応じて工夫し、取り入れることにより、文学教材をすらすら読むことができるであろう。

#### (1) 【手だて1】

発音練習、詩の音読、フラッシュカードの活用

すらすらと音読するためには、まず声を出すことである。声が小さい子への手だてとして週1回の15分間、場所を変えて（体育館で）一斉音読や3メートルほど距離をおいて交代読み等を行った。また、すらすら読むために口形や発音を意識させ、図1のような発音練習や詩の音読を行った。

授業のはじめにはフラッシュカードを使い読みづらい語や新出漢字をまとまりで読む練習をした。

(略)	アイウエオアオ	ていねいにはぎれよくはつ音しま
	しょう	
	ありさんあつまれアエイウエオアオ	
	かにさんかさこそカケキケココカコ	
	さかだちさかさまサセシスセンサン	
	ならんでなわとびナネニヌネノナノ	
	はなたばはなびらハヘヒフヘホハホ	
	まえよりまじめにマメミムメモママモ	
	やっぱりやさしいヤエイユエヨヤヨ	
	らくだいらいおんラレリルレロラロ	

図1 発音練習の詩(音読集「ひばり」)

### 【結果】

#### ① 発声練習時の児童の様子

場所を変えた広い場所での発声練習は、自然に声が大きくなり、ペアとの間隔をとった交代読みでも、相手に届くように読もうとしたり相手の声を聞き取ろうとしたりする姿が見られた。

#### ② 子供の日記から

発音発声練習後の子供の日記を紹介する。

はじめに、ていねいにちゃんと発音のしかたができるように、詩が書かれている紙をもらいました。

練習して、発音の仕方ができるようになってからかさこじぞうの練習を始めました。

ちゃんと言えて良かったです。

#### ③ アンケートより

フラッシュカードの効果についてはアンケートの結果 80%の児童がすらすら読めるようになったと答えている。

#### (2) 【手だて2】

交代読み、確かめ読み

第3時で語や文のまとまり毎にすらすら読めることを目標にした2人ペアでの1文交代読み（マル読み）や1ページ交代読み、引っかけ交代読みを行った。

第5時～9時では授業の始まりに場面毎の



確かめ読みを行った。確かめ読みでは、図2のような音読評価のワークシートを使い観点に気をつけて、ペアで評価をしながら読み合った。

のたしかめ読み			
聞きやすいはつきりした声でしたか。	聞きやすいはつきりしている。	少し聞きにくいところがある。	はつきりしていないので聞きにくい。
声の大きさはどうでしたか。	大きな声	ときどき小さくなった	小さな声
すらすら読んでいましたか。	読んでいる。	ときどき読みなおしたり止まったりしている。	ほとんど読みなおしたり止まったりしている。
読み方を工夫して読んでいましたか。	会話をしているように聞こえた。		会話しているように聞こえなかった。

ぼく・わたしの音読			
はつきりした声に気をつけて読みましたか。	気をつけて読んだ。	少し気をつけた。	気をつけなかった。
声の大きさはどうでしたか。	大きな声	ときどき小さくなった	小さな声
すらすら読めましたか。	読めた。	ときどき読みなおしたり止まったりした。	ほとんど読みなおしたり止まったりした。
読み方を工夫して読んでいましたか。	会話をしているように聞こえた。		会話しているように聞こえなかった。

音読をしたり聞いたりして気づいたこと

読んだらやさしい気持ちかわかる。

図2 音読相互評価ワークシート

【結果】

① 交代読みの児童の様子から

2人ペアではじめに1文毎、その次に1ページ毎と読み進めた。速いところは、「1ページ毎の引っかかる回数を減らそう。」や「引っかかったところで交代しよう。」等と、工夫し合っていた。40分間本読みを行ったことになるが、読みの回数に個人差はあるものの全員が集中して音読する姿がみられた。

② 音読相互評価ワークシートの感想から

ワークシートには次のような感想があり、友だちの音読を聞くことや読むこと、自分の変容に気づきが見られた。

- ・ 友だちの声を聞いて、大きな声を出すことに気付いた。
- ・ 読むときは声をはっきりさせれば読みやすい。
- ・ 音読をしながらかさこじぞうの話がわかりました。
- ・ ○○さんに前より声が大きくなっていると言われて嬉しかった。
- ・ ちょっとすらすら読めてきました。
- ・ かさこじぞうを間違えないで読めて良かった。

③ 授業終了後のアンケートより

単元終了後、児童に音読について行ったアンケートの結果を紹介する。

(ア) 交代読みと確かめ読み

問1 となりの人とマル読みの交代読みをしたり、1ページずつこうたい読みをしたりしたときはどうでしたか。

楽しかった…17人 じょうずになった…5人  
もう一回やりたい。友だちに教えて良かった。  
声が大きくなった。勉強が進んだ。緊張した。  
つまずいた。楽しくない。…各1人

問2 となりの人と授業のはじめに場面の確かめ読みをして、どうでしたか。

じょうずになった…10人 楽しかった…9人  
楽しくない…3人 きんちょうした…2人  
もう一回やりたい。ドキドキがなくなった。  
ちょっとつまずいた。うれしかった。…各1人

図3 音読のアンケートより

(イ) 音読活動の形態の比較

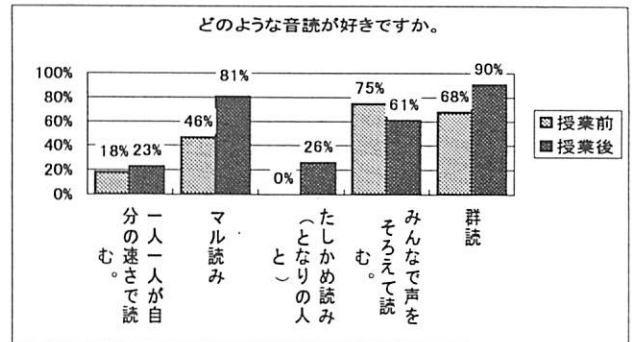


図4 どのような音読が好きですか。

(確かめ読みは授業前は取り入れていないため0%)

(ロ) 自己評価

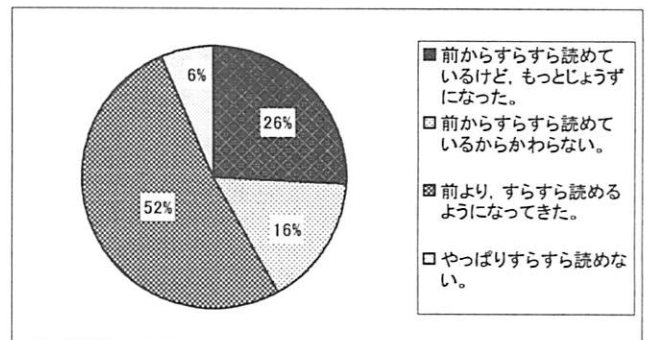


図5 音読はじょうずになりましたか。

### (3) 考察

発音・発声練習や詩の音読は、授業でも「読み手が気をつけることは」の問いに、「読む前に大きく息を吸って」「口を大きく開けて」「相手に届くように」等と答え、音読に生かされていた。声の小さな児童には声を出す手だてとして有効であったと考える。

フラッシュカードの活用は、アンケートの結果、変わらないと答えた児童を割り出したところ、ほとんどが音読を苦手とする児童であった。語のまとまり毎に読めるようになったが、意味のまとまりで、すらすら読むためには、声を出している次の語や文のまとまりを見ていなければならないので、もう少し、改善の必要がある。

1時間音読の時間を設けて交代読み（マル読み）を行ったことは、めいめい読みと違って聞き手がいるので、とばし読みができないことや読めない漢字はペアの相手が教えてくれること、全員に対して読みを聞かせるにはまだ自信がないが、1人に対して読むのは抵抗が少ないこと等から、上達がわかり楽しくできたと考える。

確認読みではワークシートの感想にあるように、相手の音読を聞いて気付いたり、自分の読みを確認したり、変容を自分で気付いたりしている。またペアに認められたことで自信に繋がっている児童もいる。このように一斉読みではついて行けず、ごまかしてしまいがちな児童も読めるように頑張ることができると考える。だが、図3、4からもわかるように、子どもたちは確かめ読みよりマル読みのほうを好んでいる。

群読活動時は、一人読みの役割分担を全員に与えたところ、個人差はあるものの自信を持って、読むようになった。また、一斉読みもすらすら読めなかった児童がついてくるようになった。

今回の単元終了後の図5のアンケート結果では、「前より、すらすら読めるようになった」

た」や「前からすらすら読めているけど、もっとじょうずになった」の78%の児童に変容がみられる。

これらのことから、発音発声練習は継続的に指導し、児童はマル読みを好むが、確かめ読みのほうが効果的なので、上手く組み合わせて活用することがよいと考える。また群読時の役割分担読み（一人読み、グループ読み、一斉読み）を取り入れることで、軍学教材をすらすら読むことができたと考える。

## 2 研究仮説2の検証

文学教材において、場面の様子や登場人物について想像を広げながら読むことにより、聞き手を意識した読み方をすることができるであろう。

### (1) 【手だて1】

会話読みや役割読み、動作化をする際、前後の文に気をつけて、どう読むのかを考えさせた。

#### 【結果】

#### ① 児童の発表の様子から

##### (7) 会話読み（第5時）

隣同士のペアで会話読みをしたところ、「ほんになんにもありませんのう」は、じいさまの言葉かばあさまの言葉かで意見が分かれた。

T 「『ほんになんにもありませんのう。』は誰の言葉？」

C1 「はじめはじいさまが言ったので、じいさまばあさまと交代して読みました。」

C2 「座敷を見まわした後、本当にと確かめているからじいさま。」

C3 「土間の方を見ていっているのはばあさまだから座敷を見て言っているのはじいさま。」

じいさまが見まわした後、「ほんになんにも～」をじいさまが言う場合とばあさまが言う場合を会話読みで比べ合った。

(イ) 役割読み (第6時)

- T 「町のどんな様子が見える？」  
 C<sub>1</sub> 「大年の市。」  
 C<sub>2</sub> 「お店の人」「買う人」  
 T 「何を売っているの。」  
 C<sub>3</sub> 「うすやきねを売る店もあれば」「松」  
 T 「ほかには？」  
 C<sub>4</sub> 「にんじんやゴボウを売っている店」  
 T 「どこを見て、にんじんゴボウに気付いたの。」  
 C<sub>5</sub> 「じいさまが言った『にんじんごぼも〜』から。」

という具合にいろいろな店の人や客の役も付け加え、役割読みを行った。すると、売り手や買い手の声の大きいので、じいさまの役も自然に声を張り上げていた。

(ウ) 動作化 (第7時)

- T 「かきおとすってどうするの。」  
 みんなで雪を掻き落とす真似をする。  
 T 「掻き落としている手をストップしてみんなで見せ合ってごらん。どうなっている。」  
 指を開いている子、爪を立てている子  
 C<sub>1</sub> 「いっぱいもっているからなでるようにしても落ちないよ。」  
 C<sub>2</sub> 「あつ、だから掻いて落とすなんだ。」  
 C<sub>3</sub> 「おじいさんもつめたいよ。」

「かきおとす」を動作化することで、じいさまの様子を想像し、読みを工夫した。

(2) 【手だて2】

読みの工夫 (ワークシート)

広げた想像を基にどう読むかをワークシートに音読記号やその理由を書き込み、話し合いや読み合いをした。

【結果】

① ワークシートから

ワークシートは図6の通りである。

はじめは、音読記号を使っていたが、「言葉で書いてもいいですか。」の児童の質問で、どう読むかを言葉で書き表しても良いことにした。

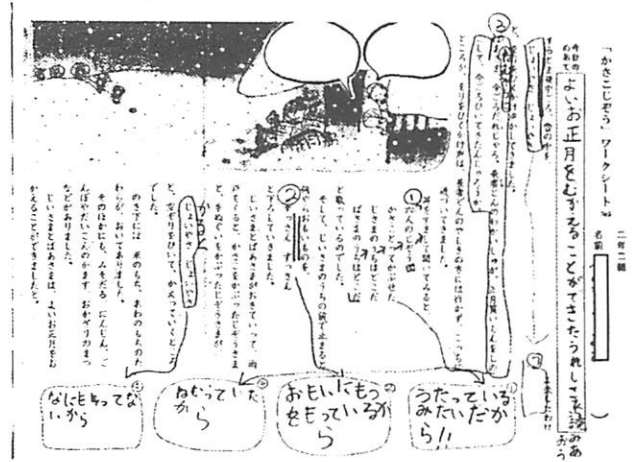


図6 ワークシート

② 児童の様子や感想から

どう読むかを話し合うと同じ文を読むのにいろいろな考えが出た。その考えを認め合い、読み合った。感想の一部を紹介する。

- ・ グループで読むときに、〇〇さんののがわかりやすい。
- ・ 〇〇さんの音読を聞いて、会話しているように聞こえたので、すごいと思った。
- ・ 同じお話でも、はやくしたり小さくしたりすることでもっと楽しくなる。

③ 単元テスト (理解) の結果から

一学期に行った文学教材『ひっこしてきたみさ』と今回の『かきおとす』の読み取りテストの結果を図7に示した。

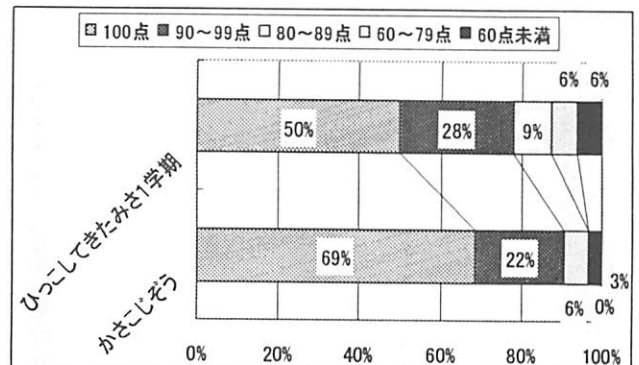


図7 テストの結果

(3) 考察

会話読みや役割読み、動作化を取り入れることで、場面の様子や人物の様子想像が広がり、聞き手を意識してどう読むのかを図6

のワークシートへの書き込みができた。書き込む際は、音読記号より「力強く」や「疲れた声で」等と記述した方が読みの工夫をより良く表現することができた。また、児童の様子や感想からペア同士やグループでお互いに読み合うことで相手の読みをよく聞きあい、読みを工夫しようとする態度がみられる。

これらのことから、想像を広げながら読むことで、聞き手を意識して読み方を工夫することができたと考える。また、図7のテスト結果の点数90点以上を取り上げると『ひっこしてきたみさ』76%、『かさこじぞう』91%になっていることから、今回、音読を工夫して取り入れることで、読み取りにも深まりがみられたと考える。

### 3 研究仮説3の検証

音読・群読で読み合い、聞き合い、話し合い、お互いを認め合うことにより、伝え合う力が育つであろう。

#### (1) 【手だて】

交代読みや場面の確かめ（ペア）読みでは、感想を述べ合ったり、「こういう理由でこう読む」でお互いの意見をグループや全体で交換したりした。

また、発展として扱った群読では、グループで役割分担をしたり、話し合いや読み合い聞き合いを行ったりした。その時の群読台本の一部を図8に示す。

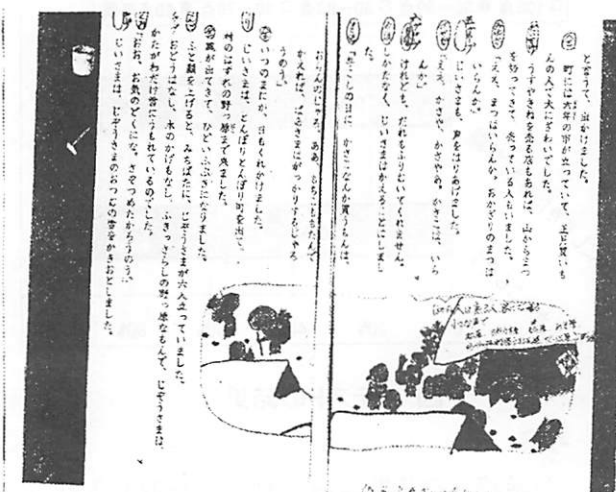


図8 群読台本

#### 【結果】

① ペア、グループ、全体それぞれの話し合い自分の意見が言えたのかをアンケートした結果、次のようになった。

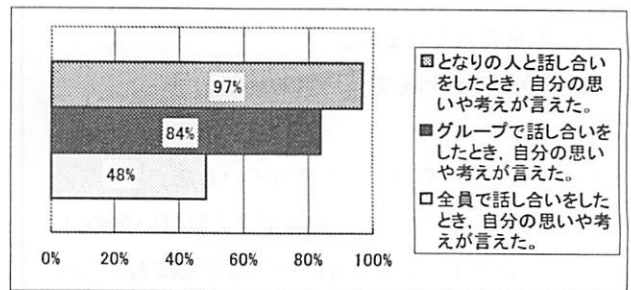


図9 授業後のアンケートより

② 群読の感想より

第13時の群読会終了後の感想の一部を紹介する。

- 大きく言って良かったです。友だちが教えて大きな声ができました。
- 群読をして、いろいろなことを言えたり、昔話を讀んだので、嬉しかったし、楽しかった。
- ほかのお母さん方が来て、ちょっと緊張しました。最後に言ってくれたお母さんの感想が嬉しかったです。
- 群読の時、ゆっくりていねいに読めました。わけは、すらすら読めるように工夫したからです。そして、口を開けて声を出しました。その時ぼくはこう思いました。みんな聞こえていると思いました。

#### (2) 考察

自分の考えや思いを伝え合うため、ペアやグループで、読み合った後、感想や意見を話し合う展開にすることで、多くの児童が感想や意見を述べている様子が図9からみられる。

発展学習の群読活動では、図8のように役割分担をする時、これまでの学習を振り返り、「ここは、～なので、…で讀んだ方がいいです。」と自分の考えを伝え合っていた。また、友だちの考えを受け止めて、音読や群読の工夫をしていくことによって、お互いを認め合う場面がみられた。群読発表会（最終時）では、これまで進んで自分の考えや思いを発表することのなかった児

童のうち数名が発表していたのは、発表に対する抵抗が少なくなったものと考えられる。これらの様子が群読の感想からみられる。

このように、読み合い、聞き合い、認め合うことは、伝え合う力が育つことに有効であると考えられる。

## IX 研究の成果と課題

### 1 研究の成果

- (1) 発音発声練習や音読練習をする時間の確保、音読活動の形態を工夫することで、すらすら読むことができるようになった。
- (2) 会話読みや役割読み等を読み取りに生かすことで、様子の想像を広げることができた。
- (3) ペアやグループで読み合い、聞き合うことで、相手の読みから学んだり、自分の読みを振り返ったりして、聞き手を意識した読みの工夫ができるようになった。
- (4) ペアやグループで話し合うことで、授業の中で考えや思いを伝え合う機会が多くなり、全体の話し合いに対する抵抗が少なくなってきた。
- (5) 群読で声を響き合わせることで、聞き手に伝える実感を味わい、聞き手から感想をもらうことで伝わった喜びを感じることができた。

### 2 今後の課題

- (1) 児童が意欲的に取り組む交代読み（マル

読み）とペア相手の読みから学ぶことの多い場面毎に読む確かめ読みを効果的に活用したい。

- (2) 音読を多く取り入れたり意見交流をしたりする時間の確保とそのための発問や板書、ワークシートにさらなる工夫改善の必要がある。
- (3) グループでの意見交流で、自分の考えや思いを伝えるだけでなく、他の意見にもしっかり耳を傾け、考える場の設定を工夫する。また、保護者との交流場面にも工夫が必要である。

### 【おわりに】

音読・群読活動を取り入れた授業で、伝え合う力を育てることを目指して、6ヶ月間、研究に取り組んできました。手探り状態でスタートし、多くの文献を参考にしながらもつまずきの連続でしたが、楽しく活動する児童の姿や変容に力づけられました。

研究期間中、忙しい中、丁寧なご指導をして下さった浦城小学校仲地千佳先生いつも親身になって御指導下さった本研究所の比嘉信勝所長、石川博基係長、比嘉清喜指導主事、そして心身お世話になった職員の皆様方へ、心より感謝申し上げます。また、研究の機会を与えて下さり、授業の際は、参観し、励まして下さった前泊加代子校長先生をはじめ、職員の皆様、そして、35期研究員の皆さんにお礼を申し上げます。有難うございました。

### 【主な参考・引用文献】

- ・文部省 小学校学習指導要領解説 国語編 東洋館出版社 1999年
- ・石田佐久馬編 音読を読み取りにどう生かすか 東洋館出版社 1993
- ・瀬川栄志編 「音読・朗読・群読・暗唱」で意欲を高める 明治図書 1996年
- ・市毛勝雄著 国語力を育てる言語技術教育入門 明治図書 2005年
- ・渋谷孝・市毛勝雄編 授業のための全発問文学教材小学2年 1990年
- ・瀬川栄志監修山本章編著 「伝え合う力」を育てる指導細案小学1・2年編 明治図書 2004年
- ・岩崎保編 音読・朗読・暗唱を活用する指導 明治図書 1989年
- ・教室の窓小学校国語 東京書籍 2006年
- ・教育科学国語教育 明治図書